

とくしへの雲

小紋潤さんに最後にあつたのは二〇一七年八月二十八日である。小紋さんのお世話を献身的に行っていた古川典子さん（残念ながらその後の二〇一八年八月に不帰の人となられた）と一緒に、長崎市長与町の「長与リハビリセンター」にお見舞いに行ったときである。小紋さんが東京から故郷の長崎に帰って間もなくの頃に、長崎を訪れる機会があり、そのときは馬場昭徳さんなども一緒に居酒屋に入り多少飲んだりした。小紋さんはあまり飲んではいけなかつたのだろうが、元気で楽しそうだった。それ以来だったので、リハビリセンターでベッドに寝ている小紋さんとは久しぶりだった。

小紋さんはお洒落なチェックのシャツを着ていた。私は写真をあまり撮る方ではないが、この時はいつも使っているアイパッドを持って行き小紋さんを撮った。いまその写真をあらためて見ながら原稿を書いている。一時間あまり彼といる話したことを思い出す。小紋さんの表情は穏やかで

優しさに満ちていた。彼は幾つもの「顔」を持っていたようだが、東京時代から私にはいつも優しく温かく、やや照れを含んだ微笑が彼の顔として真つ先に目に浮かぶ。なお、「心の花」二〇一七年二月月号の「長信↑↓短信」欄に古川典子さんが、この時の写真を載せ文章を書いて下さっている。

小紋さんには歌集の出版でいつもお世話になった。第三歌集『火の橋』以来であり、何冊作ってもらっただろう。そして、上京のたびに遅くまで付き合ってくれた。阿



馬場昭徳、故・古川典子と

伊藤一彦

佐ヶ谷の部屋に一度は泊めてもらったこともある。泊ったといえば、小紋さんが宮崎を訪れてわが家に泊ったことも一度ある。現代短歌・南の会主催のシンポジウムに黒岩剛仁さんと来宮し、二人とも拙宅に泊った。小紋さんは朝早く起きて、私の家の近くの田畑や野原を歩きまわり葦の新種はないかと探しまわったことなど思い出す。

小紋さんと宮崎との最初の縁は、宮崎市の日向学院である。二〇一七年三月号の「心の花」の小紋潤特集のインタビューで、かつて長崎からわざわざ日向学院中学に進んだことを話している。日向学院は一九三〇年に宮崎神学校として開校し、戦後の一九四六年に中学校、その二年後には高等学校を創立し、現在はミッシン系の男女共学の中高一貫校である。小紋さんはインタビューの中で「両親が熱心なクリスチャンで、兄弟もクリスチャン」「神父になりたくて自分で宮崎の神学校を選んだ。でも結局神父に挫折してそこを中退して、